

# 流通の課題

5

住まいの造りは、公団住宅に限らず、民間の住宅でも様変わりしてきた。

熊本市を中心にマンション販売などを手掛ける誠伸住宅社長の大嶋節生さん(63)は「昭和60年代までは、マンションも和室の続き間がある4DKなどが主流だった。平成に入ったころから、15〜20畳の広いリビング中心の3LDKなどになってきた」と振り返る。

ちょうど国中がバブル経済に沸いた時期と重なる。大嶋さんは畳の部屋が減った理由については、布団からベッドなどへの生活様式の洋風化や、冠婚葬祭などの行事を自宅で催す機会が減ったこと、段差を嫌ったリアフリー化などを挙げた。

一戸建て住宅も事情は変わら

## 住宅メーカー



玄関を入ると広くて明るいリビングと機能的なダイニングキッチンが目に入る。最近の住宅が重視する間取りだ＝熊本市の住宅展示場

## 岐路に立つイ草

第2部

2011・9・27

ない。  
熊本市の九州自動車道熊本インター近くの住宅展示場は、しく明るいリビングと高機能キッチンが重視されている。

ぶ。純和風や洋風、和モダンなどタイプは違うが、どの家も広く明るいリビングと高機能キッチンが重視されている。

同展示場に出店する住宅メーカー・松栄パナホーム熊本の建設部長池田隆司さん(49)は「20年ほど前までは、郡部を中心に二間続きの和室を造る家が多かった」と話す。それが今は100戸のうち5戸程度。フロアリングのリビングの隣に和室一間を置く間取りが多いという。

また、同社が標準仕様で和室に使っているのは、和紙をよりのように巻いて編んだ「和紙イ草」。イ草に比べて色あせしない、カビが生えにくい、耐久性が強いなどとされ、価格もイ草の畳並みに下がってきた。展示場の担当者は「イ草にこだわる方もいるが、ほとんどの方が和紙畳を選ぶ」と言う。

12棟のモデル住宅で畳のある部屋数を調べてみると、2部屋以上は3棟で、8棟が1部屋だった。全く畳がない家も1棟あった。全く畳がない家も1棟あった。

熊本市の新規建設は今や少数派といえる純和風住宅にこだわりの続ける。規工川隆行社長の先祖は宮大工だ。特に注文がない限りは和室にイ草の畳を使う。しかし、同社が手掛ける家も変化してきた。

「二、三年、畳は敷いても、われわれの腕の見せどころの間は要らない、という人が多くなった」と工務部長の伊藤朝明さん(58)。衣類などと同じで「低価格のメーカーが増え、住まいへのこだわりを持つ人が減っているように感じる」と言う。

普段は2部屋として使い、大勢が集まる時はふすまを開け放って広間にする。そんな和風建築の知恵を生かした二間続きの和室を設ける間取りはほとんどなくなった。伊藤さんは「極端な場合、全く和室がない家の注文をいただくこともあります」と苦笑いする。(和田毅)

# 和室より、リビング重視へ